

46 . 水牛の始まり

未亡人が、ロビンという名前の小さな息子とともに、森に住んでいました。

ロビンは親切で、思いやりのある少年でした。彼は老婦人を喜ばすためにできることは、すべてやりました。年が過ぎ、ロビンは素敵な若者に成長しました。

ある日、ロビンは言いました。「私たちの森での生活は、そんなに良くはなっていませんね、おかあさん。私は王様の宮殿に行って、仕事を探したい。」

未亡人は、彼女の息子を行かせたくなかったのですが、しかしついには彼を祝福し、彼に忠告を与え、幸運を祈りました。

ロビンが宮殿に着いた時、守衛が門に立っているのを見ました。守衛は、立派な制服を着ていたため、ロビンは彼が王様だと間違えました。ロビンは彼の前に跪くと言いました。「王様、私はあなたの宮殿で働きたいのです。」

「私は王ではない。」と守衛は答えました。彼は手を振って、言いました。「あっちへ行きなさい。あっちに王様がおられる。」

ロビンは少し遠くへ歩いて、もうひとりの守衛の所へ行きました。この守衛もやはり立派な制服を着ていました。ロビンは彼が殴打と間違えました。そして守衛の前に跪いて、言いました。「王様、私はあなたの宮殿で働くために参りました。」

「私は王ではない。」と二番目の守衛は答え、彼は王様の住居へ案内しました。ロビンは、そこに肺って、すぐに王に会いました。

ロビンは王に近づき、彼の前に跪いて、彼の右手にキスをしました。

「お前は、何がほしいのか？」と王は問いました。

「王様。」と便は答えました。「私は仕事を探しに来たのです。」

「大変よろしい。」と王は言い、ロビンに、王の豚の世話をさせるように、僕に命じました。

ロビンは彼の仕事をよくやりました。彼は、長時間、熱心に働きました。彼は毎日豚に餌を与え

ました。すぐに、豚は太って、健康になりました。

ある朝、王様は、豚に餌をやって働いているロビンを訪ねました。彼は、彼の豚が太って健康そうなを見て、驚きました。王様は大変喜びました。「君は自分の仕事を良くやっている、ロビン。」と彼は言いました。「このことのために、私は君に褒美をあげよう。」

「ありがとうございます。王様。」とロビンは言いました。

「お前は、賢明な者が勉強するものを勉強したいか？」と王は尋ねました。

「もし、私にそれをお望みなら、喜んで。」ロビンは丁寧に答えました。

次の日、王様は、ロビンの先生を見つけるように命じました。ひとりの先生が見つかり、宮殿に連れて来られました。先生は直ちにロビンの勉強を始めました。

ロビンは、熱心な学生であることを示しました。彼は科目を熱心に学びました。一ヵ月後、先生は彼に教えることがなくなりました。

王様は、他の先生を呼びました。しかし、ロビンを一ヶ月教えると、二番目の先生は、彼が教えられることは、すべて学んだことがわかりました。

王様はまた、他の先生を呼びました。しかし、ロビンは彼の学問を良く学び、大変速く習ったので、一ヵ月後には、三番目の先生も、彼に教えることはもうありませんでした。

王様がロビンに行っていることを知った王様の相談相手は、嫉妬するようになりました。「ロビンは、新参者だ。しかし、彼は王様から沢山の特権を得ている。」と、ひとりの相談相手が他の者に言いました。

「王様は彼のために三人の先生を雇ってきた。」と他の者が言いました。

「彼をこき落とす方法がある。」と三人目が言いました。

そして、王様の相談相手たちは、手紙を用意して、ロビンが書いたことにし、そこには、彼が王様に、飛ぶ馬、カバヨン・ピントラゲンを見た、ということを書いていました。

フィリピン 神話と伝説

手紙を読んだ後、王様はロビンを呼びにやりました。「お前は飛ぶ馬を見た、と言う。一ヶ月やるから、その馬を見つけれ。失敗したら、罰は、死ぬことだ。」

ロビンはその言葉にショックを受けました。彼は、自分がそんな手紙を書いていないことを知っていました。しかし、静かにしていました。王様は彼の言うことを信じないと知っていたからです。「私は、飛ぶ馬を見つけるため、ベストを尽くします、王様。」と彼は言いました。

王様はロビンに、いくらのお金と食べもの、そして、その他の彼の旅に必要なものを与えました。次の日、すべてのものが揃って、ロビンは出発しました。

ロビンは、すぐには飛ぶ馬を探しませんでした。最初に、彼は林の中にいる彼の母の所へ行き、彼が持っていた、いくらのお金とたべものを与えました。

ロビンの母は彼の思いやりに感謝し、問いました。「どうして帰ってきたんだ？何か悪いことでもあったのか？」

「王様は私に飛ぶ馬を見つけるように命じられたんだ。」とロビンは答えました。「僕は、どこで、どうやって見つけたらいいか知らないんだ。」

「私は、飛ぶ馬なんか見たこともない。」と彼女は言いました。「私も、そんなのは聞いたことがないよ。」

悲しそうに、ロビンは彼の母の家を出ました。母は彼に同情する以外、何もできませんでした。彼は一日旅をして、すぐに夜になりました。

すると彼は遠くに光があるのを見ました。彼は光の方向へ行き、その光は、小屋から出ていることを知りました。

小屋に近づいて、ロビンはそこからの声を聞きました。それは、「私の帽子へようこそ、ロビン。」と言いました。

ロビンは、こんなに遠く、隔たったところの誰かが、自分の名前を知っているのを不思議に思いました。彼は小屋に入り、老人を見ました。

「こんばんは、おじいさん。」ロビンは彼に挨拶しました。

「こんばんは、ロビン。」その老人は答えまし

た。「しばらく休みなさい。夕食を食べて、そして、私に、あなたの問題をすべて語りなさい。」

ロビンは座って、老人は、彼に小さな鉢にいっぱいのごはんを与えました。小さな鉢の中に、ごはんがとてもわずかなのを見て、ロビンは、気が進みませんでした。「どうしたんだ、ロビン。ごはんを食べなさい。」

そこでロビンは食べはじめました。彼が驚いたことには、彼はごはんを食べたのに、鉢はいつもいっぱいなのです。彼は、それが魔法の鉢だと知りませんでした。

次の朝、老人は、彼に赤いハンカチを与えました。「わたしはこのハンカチをおまえに与えよう。」と彼は言いました。「それは、お前が探している飛ぶ馬を見つけて、捕まえるのを助けてくれるだろう。」

ロビンは老人に礼を言いました。「でも、私はこのハンカチをどうやって使えばいいのですか？」と彼は聞きました。

「それは簡単だ。」「お前が飛ぶ馬を見たら、それを振るんだ。そうすれば、馬はお前の所に来るだろう。」

ロビンは、もう一度老人に礼を言って、出てゆきました。

七日間、彼は旅をしました。ついに、疲れて、眠くなり、彼は木の下で止まって、休みました。

するとロビンは細い叫びを聞きました。彼が顔を上げ、見ると、その叫びは、大きな赤い蟻から来ていました。その蟻は、ふたつの枝の間につかまっていた。

優しい手で、ロビンは蟻を助けました。

「ありがとう、ロビン。」と蟻は言って、続けました。「君が助けを必要としている時は、僕が助けるよ。」

ロビンは、もう一つの叫びを聞く前に、数歩も歩きませんでした。彼は母鳥が、子どもと一緒に、蛇に襲われそうになっていました。ロビンは、蛇を追い払いました。

「ありがとう、ロビン。」と母鳥が言いました。「いつか、あなたを助けてあげるわ。」

フィリピン 神話と伝説

一日中旅をして、ロビンは、浜辺に着きました。彼は魚が岸に上げられてしまっているのを見ました。魚は泣いていました。海に帰れなかったからです。

「この弱い魚は私の助けが必要だ。」とロビンは考え、魚を海に帰してやりました。

「ありがとう、ロビン。」と魚は言いました。「いつか、きみを助けてあげるよ。」

さて、老人はロビンに、彼は第7の山で飛ぶ馬を見つけるだろう、と言いました。ジュアンは、旅をして、第7の山まで着き、そこにはすばらしい馬が立っていました。それは彼を見ると、飛び去ろうとしました。すぐに、ロビンは赤いハンカチをポケットから取り出して、馬に向かって振りしました。

馬はロビンの方に飛んで来ました。

「今日が、お前が私を捕まえるために、王様に与えられた最後の日だ。」その馬は彼に言いました。「私の背中に乗りなさい。」

ロビンは、馬の背中に飛び乗って、王様の宮殿にむかって、まっしぐらに飛びました。人々は飛ぶ馬を見て、ウワッ、と叫びました。「これは、カバヨン・ピントラゲンだ！」と彼らは言いました。

ロビンは王様に飛ぶ馬をプレゼントしました。王様はどんなに幸せだったことでしょう。

ロビンが飛ぶ馬を王様のために捕まえることができたことを知らされた、王様の相談役たちの落胆は、大変なものでした。彼らは、ロビンをおとしめる別の方法を考えました。

彼らは、ロビンが書いたかのようにして、もうひとつの手紙を書きました。その手紙は、王様に、魔法の鳥がいて、ふんを使って、人間を石に変えることができる、というものでした。

手紙を読んで、王はロビン呼びにやりました。「面白い手紙をありがとう。」と彼は言いました。「お前は私に、魔法の鳥を知っている。それはふんで人間を石に変えられるそうだな。一ヶ月やるから、その鳥を見つけて、宮殿に連れて帰って来い。失敗したら、お前は死ぬんだぞ。」

ロビンは、王様の相談相手たちがまた、彼に対して陰謀をたくらんだ、と知りました。彼はどう

しようかと考えました。

「私は、お前が魔法の鳥を見つけるための助けとなるように、飛ぶ馬を貸してやろう。」と王様はロビンに言いました。

ロビンは飛ぶ馬に乗って、馬は彼と飛んで行きました。彼は飛ぶ馬を老人の小屋に導きました。

「七つ目の山に行け。」と老人は言いました。「そこで魔法の鳥を見つけるだろう。目が覚めていたら捕まえる。」

ロビンは七つ目の山に着くや否や、魔法の鳥を見ました。その鳥は、すっかり目覚めていて、ロビンはそれを足で捕まえました。すると、彼は飛ぶ馬に乗って、宮殿までずっと飛んで帰りました。

魔法の鳥は、ふんで人々を石に変えることができますが、しかし、それは人々を歌で眠らせることもできたのです。

ロビンが宮殿に着くと、鳥は美しい歌を歌い始めました。王の相談相手たち全員はその歌を聞いて、すぐに眠りました。するとロビンは王様の住居に急いで、彼に魔法の鳥をプレゼントしました。鳥はもう歌うのはやめていました。

魔法の鳥を見て、王様はどんなにうれしかったことでしょう！彼は鳥をすてきな籠に入れて、一日中、ずっと美しい鳥を見ていました。

王様の相談相手たちは、三日三晩ずっと眠っていました。彼らが目覚めた時、ロビンが旅から帰ってきて、魔法の鳥を連れ帰ったことを聞いて、悔しがりました。

三度目に、王様の相談相手たちはまだ、ロビンをおとしめる方法を考えました。彼らはもうひとつの手紙を用意しました。それによると、ロビンはリヤナ・エド・ポセグ・ナ・ダヤット、という海の底の女王を知っている、ということでした。

手紙を読んだ王様は、ロビン呼びにやりました。「私は、お前の面白い手紙を見た。」と王様は言いました。「お前は、海の底の女王を知っているそうだな。一ヶ月以内に、彼女を私のところに連れてきてほしい。失敗した時の罰は、お前が死ぬことだ。」

また、王様はロビンを飛ぶ馬に乗せました。そして、ロビンは飛ぶ馬に乗って、飛び去りました。

フィリピン 神話と伝説

いつものように、ロビンは最初に老人の所に行きました。

「心配するな。」と老人は言いました。「飛ぶ馬がお前の探している女王の所へ導いてくれるだろう。」

ロビンは、飛ぶ馬の背中に乗って、また旅を続けました。一日旅をして、ロビンは、海の真ん中にあるバルコニーを見ました。

「そのバルコニーは海の底の女王のものだ。」と飛ぶ馬が言いました。「でも女王は何かおかしい。彼女は僕を彼女の馬にしたいようだ。」

しかしロビンは答えました。「飛ぶ馬を自分のものにしたいと思わない者がいるだろうか？」

すると女王がバルコニーに現れ、飛ぶ馬に乗っているロビンを見ました。

「ロビン、私はあなたの馬が気に入った。」と女王は言いました。「私がそれに乗ってもいいかい？」

「勿論です。」とロビンは答えました。彼は降りて、女王が乗りました。

「それは、あなたを乗せて、空を七回飛び回るでしょう。」とロビンは女王に言いました。「七回飛んだ後、私は喜んであなたにその馬を差し上げます。」

女王は馬に乗って、馬は彼女を乗せて空を飛び回りました。彼らは回りに回りました。七回目に回わる時、ロビンも馬に乗り、王様の宮殿のまっすぐに飛んで行きました。

彼らがそこに着くや否や、ロビンは、王様に女王をプレゼントしました。

「私はあなたと結婚したい。」と王様は彼女に言いました。

「私はあなたと結婚したくない。」と女王は答えました。「私の願いは、ただ私の海の王国に帰ることだけです。」そして、彼女は泣きに、泣きました。

しかし、王様は女王の涙では動かされませんでした。彼は彼女の嘆願を受け入れませんでした。そして、数日は、数週間と続いて行きました。

するとある日、女王は言いました。「あなたが、

私のひとつの願いを承諾してくださるなら、私は喜んであなたの妻になります。」

「それは何か？」

「宮殿への途中、」と女王は話し始めました。「私の櫛を、森の中に落としました。私はその櫛を取り返したいのです。」

「あなたの願いは、承認された。」と王様は言いました。彼はロビンを呼びにやって、彼に、森の中にある女王の櫛を見つけるように言いました。

ロビンは急いで出て行き、森の中で、友だちの大きな赤い蟻にあいました。ロビンは彼の問題を蟻に語りました。大きな蟻は、鐘を鳴らして、すぐに、たくさんの蟻が群れをなして集まって来ました。しかし、いくつかの蟻はまだ来ていません。すぐにこれらの蟻も到着しました、彼らは、女王の櫛を運んでいたのです！彼らは森の中で櫛を見つけ、彼らの親分である大きな赤い蟻の所へ運んできていたのです。

大きな赤い蟻は、ロビンに櫛を渡して言いました。「私は、一度あなたを助けると約束しました。今やったことは、あなたが私に数週間前にやってくれたことへの感謝の印です。」

「ありがとう、私の友だち。」ロビンは言い、櫛を持って去ってゆきました。彼が宮殿に着くと、彼は王様にそれを渡し、今度は王様が海の国の女王に渡しました。

「さあ、あなたの願いは叶えたぞ。」と王は言って、「あなたは私と結婚するのです。」と言いました。

「そんなに急がないで。」と女王は答えました。「私にはもうひとつ、願いがあります。」

「今度は何だ？」

「あなたの宮殿に行く途中、私は海に指輪を落としました。」と女王は言いました。「私は指輪を取り返してほしい。」

王様はロビンに、指輪を取ってくるように命じました。そこで、ロビンは海に行って、そこで友だちの魚にあいました。ロビンは魚に、女王の指輪のことを話しました。

「心配しないで、ロビン。」と魚は言いました。

フィリピン 神話と伝説

「お助けしますよ。」そしてすぐに、それは警笛を鳴らしました。たくさんの魚が来ましたが、少しの魚はそこにいませんでした。

しかしながら、すぐに他の魚も到着しました。彼らはゆっくり泳いで、指輪を運んでいたのです。それは女王の指輪でした！

「私たちは、海の底でこの指輪を見つけました。」彼らは彼らの王様に言いました。「私たちはあなたにこれを渡すために来ました。」

魚の王様は、指輪を持って、それをロビンに渡しました。

友だちの魚に礼を言って、ロビンは指輪を持って宮殿に急ぎ、王様にそれを渡しました。そして、王様はそれを海の国の女王に渡しました。

「さあ、あなたの指輪は返ってきた。」と王様は言いました。「私と結婚してくれますか？」

「そんなに急がないで」と女王は答えました。「最後のお願ひがあります。私は、あなたに、私のため、天国の水と、地獄の水を持ってきてもらいたいのです。」

王様はロビンに天国の水と地獄の水をとってくるように命じました。王様はロビンに水を汲んでくるための二つのビンを与えました。

ロビンは出かけて行って、友達の水鳥に会いました。

ロビンが探している者を知った後、水鳥は言いました。「心配しないで、ロビン。私があなたに水を取ってきてあげましょう。」そう言うと飛んで行き、それぞれの羽の下に、瓶が結びつけられていました。

水鳥は天国に飛んで行き、右の翼の下にある瓶に天国の水を満たしました。すると、それは地獄へ行って、左側の翼の下の瓶を地獄の水で満たしました。すると、水鳥は、ロビンが座って待っているところへ飛んできました。

この時まで、その水鳥は疲れきっていて、ロビンの足もとで、倒れて死にました。

ロビンはその水鳥が大変気の毒に思えて、重い気持ちでその水鳥を森に埋めました。そして、彼はふたつの瓶を持って王様に渡し、王様は海の国の女王に渡しました。

女王は水を取り、言いました。「王様、あなたと結婚する前に、私はあなたが私の夫にふさわしいかどうか、調べたいのです。大きな皿と、大きなナイフがいります。」

大きな皿と大きなナイフが運ばれて来ました。すると女王は、王様に横になるように頼み、王様はそうしました。次に女王は王様の首に向かってナイフを向けました。

王様が鋭いナイフの首に感じると、立ち上がって、叫びました。「私はまだ、死にたくない！」

女王はロビンを次に呼び、彼に横になるように言いました。ロビンがそうすると、注意することもなく、女王はナイフを取り、ロビンを切り刻みました。そして、女王は天国の水が入った瓶を取り、ロビンの切り刻まれた肉の上に水を注ぎました。すぐに、ロビンは以前のような体になって、生き返りました。そして彼は以前よりもすてきになっていました。

王様は、彼の見たことに、肝をつぶしました。「私はもう、体を切り刻まれることを気にしていません。」と女王に言いました。

そして、王様は女王の前で横になり、彼女はナイフを取って彼を切り刻みました。次に彼女は地獄の水を取り、ばらばらになった王様の体の上に注ぎました。すぐに、肉は動き出して、カラバオ（水牛）が立ち上がりました！

女王はカラバオを農夫の所に送り、農夫は、彼の鋤を結び付けました。

「私にそんなことをするな！」とカラバオは叫びました。「私は王様だ！」

農夫は、笑いに笑いました。彼が大きな声で笑うので、カラバオはぼやくのをやめました。

ロビンと海の国の女王は結婚し、彼らはいつまでも幸せに暮らしました。ロビンは彼の年取った母を忘れませんでした。彼は母を呼んで、彼女は彼女の息子の幸運を喜びました。

練習問題

新しい言葉の学び

次の言葉の意味を辞書で調べなさい。その言葉を使って、文章を作りなさい。

フィリピン 神話と伝説

- 1 . thoughtful
- 2 . improve
- 3 . bless
- 4 . mistook
- 5 . quarters
- 6 . tutor
- 7 . departed
- 8 . fierce
- 9 . droppings
- 10 . penalty

2 .あなたはどの登場人物を一番立派だと思えますか？何故ですか？

問いに明確に答えなさい。

- 1 . ロビンはどんな少年でしたか？
- 2 . リボンは、ふたりの守衛を王様だと思ったのですか？
- 3 . 王様はロビンのどんな仕事をあたえましたか？
- 4 . ロビンは与えられた仕事をしましたか？
- 5 . 王様はロビンにどんな褒美を与えましたか？
- 6 . 王様の相談相手は、ロビンをおとしいれるために何をしましたか？
- 7 . 王様がロビンに与えた仕事を実行する助けをしたロビンの三人の友だちの名前を書きなさい。
- 8 . 三人の友人にロビンが行った親切な行動は何でしたか？
- 9 . 老人はロビンが王様の命令を実行するために、どんな助けをしましたか？
- 10 . あなたは、この物語の終わりを好きですか？はい、か、いいえ、か、その理由を書きなさい。

物語をまとめる

この物語は、いくつかに分けることができます。それぞれの部分に分けてみなさい。

明確化と発展の評価

- 1 . 次の登場人物は、どんな特色を現していますか？
 - a. ロビン
 - b. 王様
 - c. 老人
 - d. 蟻
 - e. 鳥
 - f. 魚
 - g. 飛ぶ馬
 - h. 王の相談相手
 - i. 女王
 - j. ロビンの母